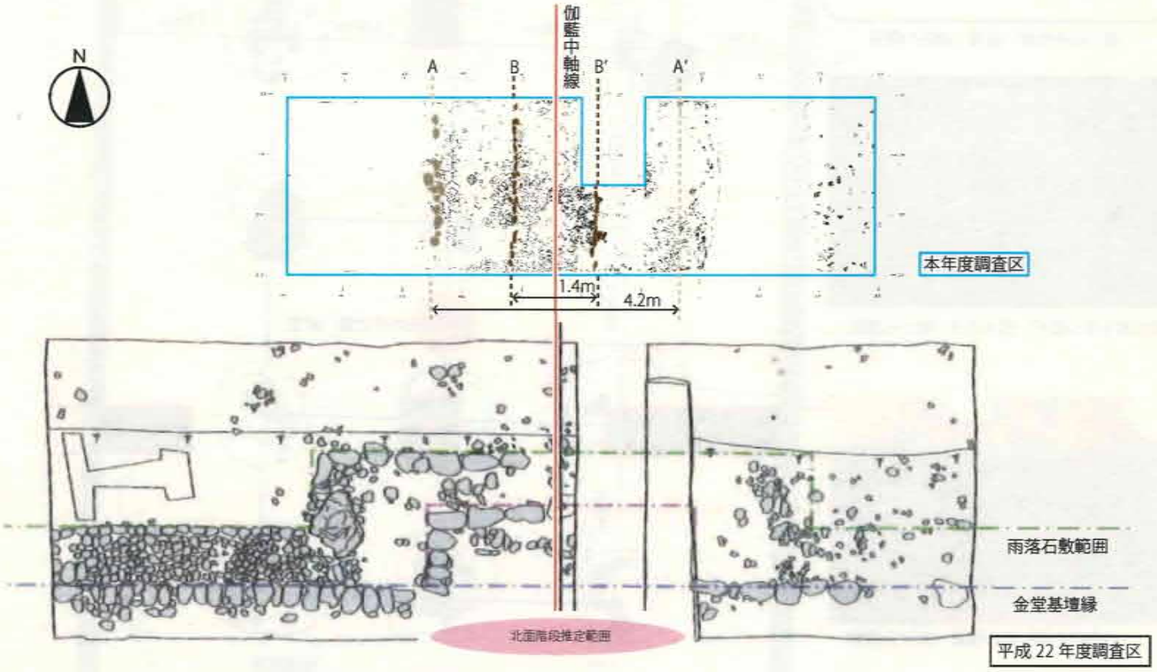
2. 金堂・講堂中間地区

昨年度に調査した金堂の北面階段の延長線上で，石列で区画した範囲に小石や瓦片を敷き詰めた道路跡が検出されました。伽藍の中軸線との対称性や石の大きさなどから，石列 B と B' がセットとなり道幅約 1.4m（5 尺），石列 A とセットとなる石列 A' は後世の攪乱（かくらん）で壊されていますが約 4.2m（14 尺）となります。この 2 組の道路は埋没時期に差がないことから，同時に使用されていたと考えられます。仏教儀式において，位の高い人が中央を，低い人が外側を歩いたのかもしれません。

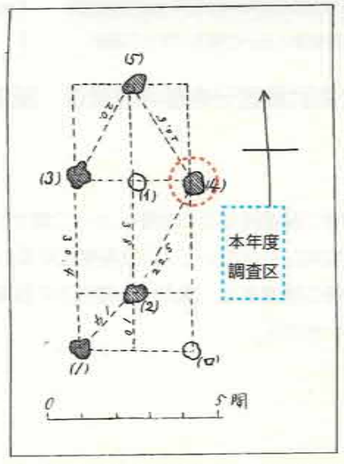


金堂北面階段と通路通路状遺構の関係（S=1/100）

3. 経蔵東地区

推定経蔵跡の基壇東側付近と想定される位置に調査区を設定しました。残念ながら経蔵に直接関わる遺構は確認できませんでしたが，白色粘土を用いる整地層が検出されました。経蔵の基壇に伴うものか，あるいは建物周囲の整地層の可能性が考えられます。なお，調査区の西側には経蔵のものと考えられる礎石が残っています。

調査区全景（東から撮影）

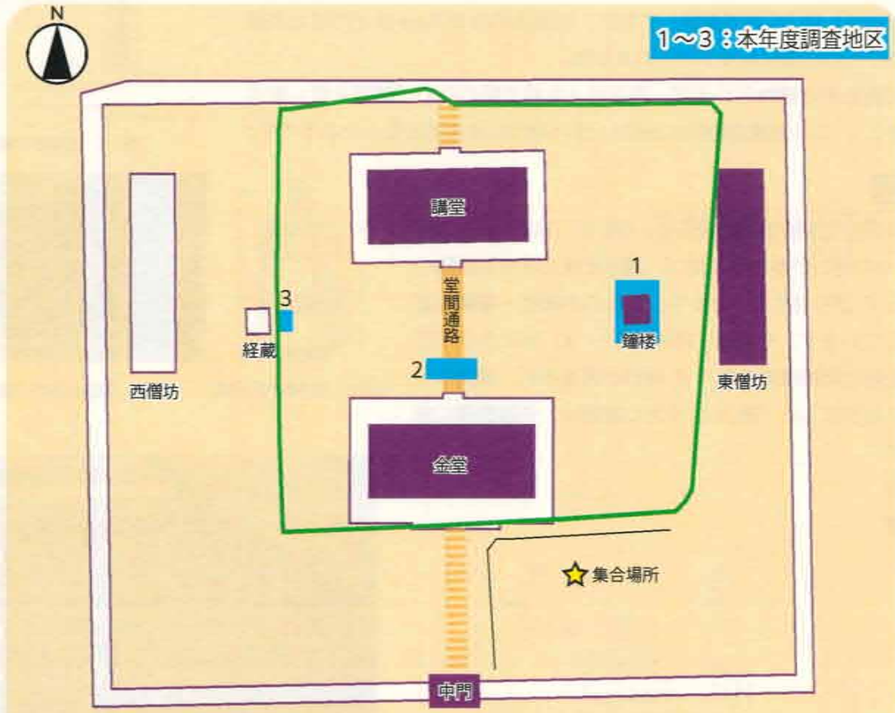


『東京府史蹟勝地調査報告書』の推定経蔵跡

国指定史跡武蔵国分寺跡（くにしていしせきむさしこくぶんじあと）　附東山道武蔵路跡（つけたりとうさんどうむさしみちあと）
推定鐘楼（しょうろう）跡他　発掘現場見学会

平成 23 年 11 月 19 日（土）
午前 10 時～　午後 1 時 30 分～
主催：国分寺市教育委員会・国分寺市遺跡調査会
問い合わせ先：ふるさと文化財課（TEL042－300－0073）

国分寺市では，国指定史跡武蔵国分寺跡　附東山道武蔵路跡を歴史公園として整備する事業の一環で，僧寺伽藍の構造，規模や配置などを確認するための発掘調査を平成 16 年度から行っています。本年度は 8 地点の調査を予定しておりますが，本日はこれまでに様相が明らかになってきた 3 地点をご覧いただきます。なお，ここでご報告するのは調査中の現段階での所見であり，今後の検討によって変更となる場合もありますことをご理解ください。



武蔵国分僧寺 伽藍中枢部（■は発掘調査で規模が判明している遺構，□は公園内）

本年度の主な成果

全国の国分寺でも発掘調査事例が少ない，2 つの大きな成果がありました。

①推定鐘楼跡が掘り込み地業による低い基壇を有することと，建物の平面規模を明らかにすることができました。

②金堂と講堂の間に，瓦と玉石敷きの通路を設けていることがわかりました。このことは通路で結ばれた主要建物相互の関連性や，国分寺で行われた儀式を復元するための重要な手掛かりとなります。

⚠ 1. 遺構保護のため立入りできない箇所がございます。係員の誘導に従ってください。
2. 足元に気をつけてお進みください。特に調査区の縁に立つと崩れる恐れがあります。

1．鐘楼地区

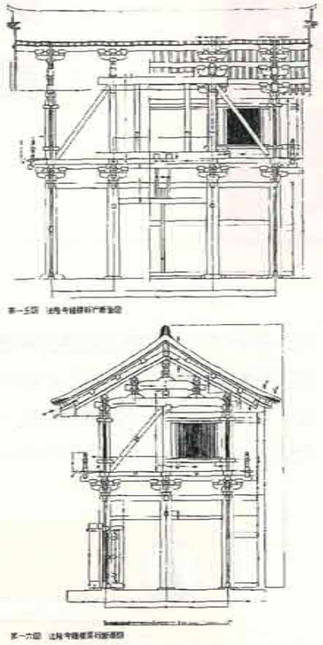
鐘楼とは

鐘楼とは，梵鐘（ぼんしょう）を吊る二重の建物のことです。奈良時代には鐘の音は時を告げる手段であり，鐘楼は国分寺伽藍の中でも重要な位置付けがなされていました。鐘楼は，経典を納める経蔵（きょうぞう）と同じ大きさで講堂の東西に配置されるのが一般的であり，どちらが西でどちらが東という厳密な決まりもないため，発掘調査で検出された遺構が鐘楼か経蔵かを決定することは困難です。武蔵国分寺跡では，東大寺の配置にならって東を鐘楼跡と推定しています。

法隆寺には奈良時代に創建された経蔵と平安時代に再建された鐘楼（図 1）が残っており，国分寺の鐘楼の構造を考える大きなヒントになります。天平 19 年（747）に記された法隆寺の財産目録である『資材帳（しざいちょう）』には，鐘楼・経蔵の規模について「長三丈一尺，広一丈八尺」（※一尺≒30cm，一丈＝十尺）とあり，現存する鐘楼・経蔵や，発掘された武蔵国分寺鐘楼の大きさとほぼ一致することから，武蔵国分寺の鐘楼も法隆寺とよく似た建物と推測できます。

奈良時代の梵鐘（図２）は 15 例が現存しており，口径は平均 107cm ほどの巨大な鐘です。梵鐘は建物中央の柱間に吊り下げられました。

ところで，お寺で鐘を吊る建物といえば，現在は４本柱で壁のない「鐘撞き堂」形式が一般的です（図３）。これは鎌倉時代に出現し，江戸時代には主流となったようです。



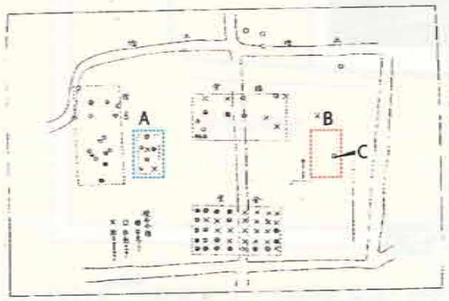
（図１）法隆寺の鐘楼

これまでの調査

大正 12 年の『東京府史蹟勝地調査報告書（とうきょうふしせきしょうちちょうさほうこくしょ）』（図 4）では，講堂の西の A の位置に５つの礎石（そせき）が規則的に並び，講堂を挟んで左右対称の B の位置にも礎石 C が存在することから，これらが鐘楼・経蔵の遺址であると推定しています。その後，昭和 39 ～ 41 年にかけて行われた僧尼寺伽藍地の発掘調査の中で B 地点が調査され，遺構の平面規模が明らかになりました（図 5）。今回の調査は，史跡整備に向けて推定鐘楼跡のより詳細な規模や構造を把握する目的で行うものです。

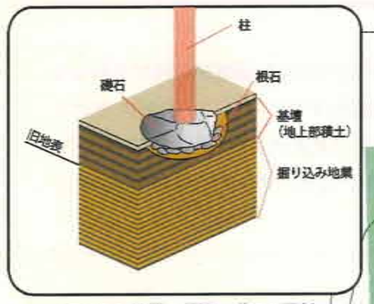
（図２）奈良時代の梵鐘

（図３）現国分寺の「鐘撞き堂」



（図４）『東京府史蹟勝地調査報告書』の伽藍配置図

（図５）推定鐘楼跡全景（南から撮影）

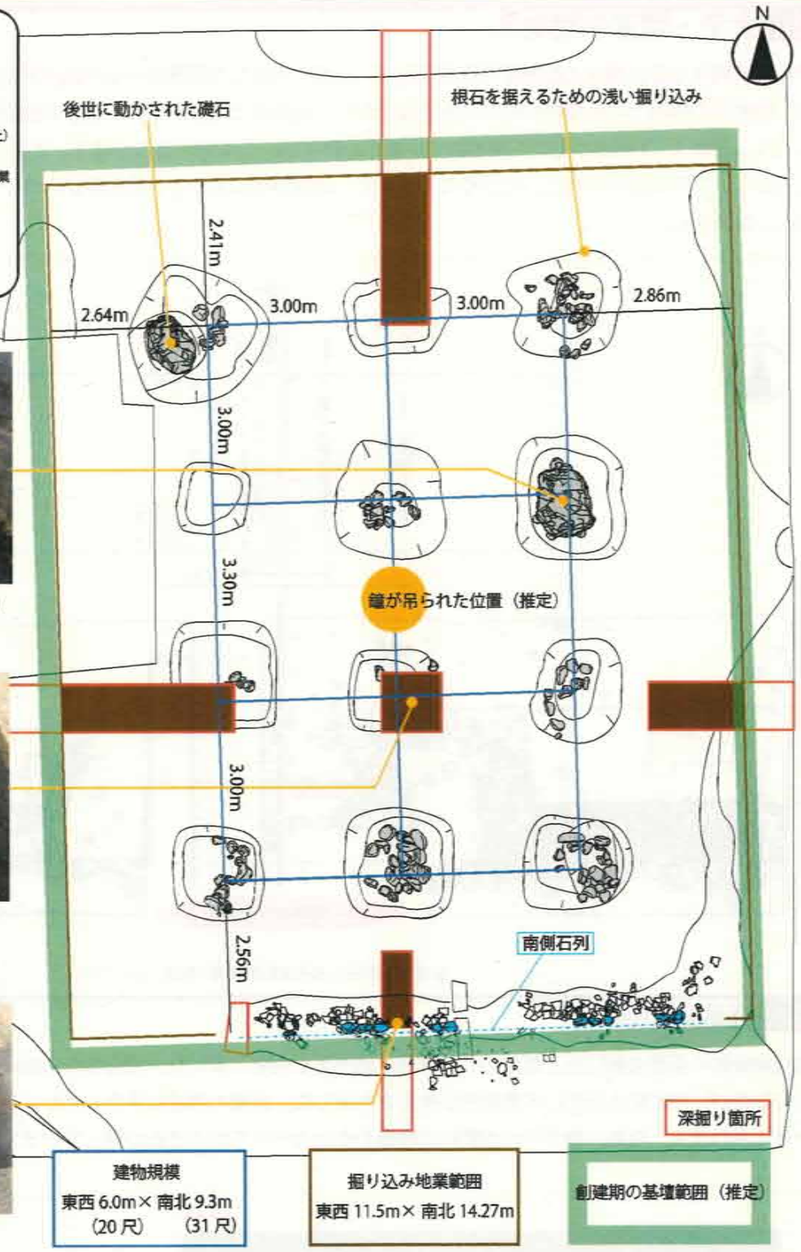


掘り込み地業・基壇・礎石の関係

原位置を保つ礎石　図４のＣ（南から撮影）

中央部の掘り込み地業（南から撮影）

南側基壇縁と石列の関係（東から撮影）



史跡武蔵国分寺僧寺鐘楼跡　調査状況図（S=1/100）※平成23年11月現在（数値は暫定値）

今回の調査成果

① 建物は，礎石建ちの南北棟総柱（そうばしら）建物で規模は桁行２間 × 梁行３間。柱間の寸法は桁行方向の中央間のみ 3.3m（11 尺），その他は 3.0m（10 尺）です。屋根は瓦葺の切妻造と考えられます。建物の主軸は金堂・講堂に対して 1° ほど北が西へ傾きます。

② 建物の範囲全面に，深さ約 50cm の掘り込み地業を行っており，範囲はおよそ東西 11.5m，南北 14.27m に及びます。

③ 南側の基壇（きだん）縁では，外側に自然石・内側に瓦を並べていることがわかりました。この状況は南側以外では確認できないため，南からの見栄えを意識して一面のみ行われたと考えられます。また，石列は当初の基壇の上から据え付けられていることから，創建以後の基壇の補修である可能性があります。

④ 創建時の基壇縁はこの補修によって壊されていて不明ですが，掘り込み部周囲の地上部の積み上げ状況から，建物周囲の各方向に９尺ないし 10 尺程度広がるものと想定されます。

⑤ 創建時の基壇高は，残存する礎石との比高差から，50cm ～ 80cm 程度と想定されます。調査区内から階段等は検出されていません。